

2017年 平和首長会議 青少年「平和と交流」支援事業に参加して

Lucas Fernandes Alberto (サントス、ブラジル)

「HIROSHIMA and PEACE」支援事業に参加する機会をいただけてどれほど感謝しているか、言葉では言い表せません。世界中の人たちに会い、様々な考え方を知りました。同一の事実を聞いた後でも、私たちは異なる結論に至りました。これは人類一人一人が独自の感性を持っていて、状況に対する対応も人それぞれであるということの確固たる証拠です。被爆者の証言を聞き、広島平和記念資料館を訪れ、松井広島市長への質問の機会をいただいた後、私はこの事実を心に留めたまま、ブラジルへの帰路に就きました。その間に、私はそこで得た知識を振り返り、その知識を私自身、愛する人たち、そして後世の人々のため、核兵器がない平和な世界の実現に向けてどのように用いることができるか考えました。

そして、それは簡単な仕事ではないという結論に至りました。しかし私は、様々な方法を試みながら、自分の役割を果たしていきたいと考えています。

ですから、サントス・カトリック大学の国際問題週間（9月の最終週）に、国際的な市民社会組織がどのように平和を推進するのかについての討論が行われ、私と同じく今年8月に広島を訪れていたヴィクター・アウグスト・メンデス氏の呼び掛けにより、私もその討論に参加することになったということをお伝えできるのを嬉しく思います。平和首長会議に関する情報を共有できることは、核兵器廃絶という我々の目標へ向けた重要な一歩です。しかし、振り返ってみると、平和首長会議についてより詳しく、実務的な討論で語れるレベルで知ることができていればと思います。平和首長会議の複数の事務所を訪ね、より多くの職員（特に外国人の職員、もしあればですが）に会うことができていれば、経験全体をもう少し肉付けし、話に耳を傾け、人々にとってより身近なものとするのに大いに役立ったことでしょう。

サントス市の国際関係課長であるパウラ・クワリアト氏に広島への旅についての報告を行う中で、近い将来サントス市に平和市議会を常設する計画があることを知りました。平和の取組が市からのより大きなサポートをもって受け入れられるというチャンスは、決して過小評価されてはなりません。そのことは、平和首長会議の役員都市であることと併せて、サントス市を他の都市（ブラジル国内だけではなく、南米、ひいては全世界の都市）にとっての見本とするものです。

「HIROSHIMA and PEACE」は極めて豊かな素晴らしい経験でした。私がそこで得た知識にはすぐに活用できるものもありましたが、ほとんどは全く異なるブラジルの実情に合わせて「翻訳」する必要があります。そのために、私はPET エデュカサオ・ポピュラー（国民教育に取り組む私の大学の公開講座）に連絡を取りました。10月の初めには、広島の教育が、その都市の特異性を中心に展開しつつも、私が日本を訪れる度に目にしているような高い教育水準をいかにして維持しているのかという点について、彼らと話を予定しています。私が強く信じていることの一つに、学びとは、単に良い教育を（特に社会的弱者に）提供するだけでなく、それと同時に学習者が所属するコミュニティにとっての重大な問題について議論を行うことにより達成されるというものがあります。これは私の人生の公私にわたる目標の一つでした（それは現在も変わりません）。

北朝鮮やアメリカによる脅威が大幅に増加していることは世界中が知るところです。ブラジルも例外ではありません。そのため、前述の団体からのサポートに加え、

私の個人的な友人でサンパウロ連邦大学の社会福祉学部長であるタニア・マリア・ラモス・デ・ゴドイ・ディニス教授とも、核軍縮や金が往々にして戦争遂行のための努力を誘導する手法について、一覧の講演を私たちの大学で行うことはできないか、話し合っています。

こうした小さくても具体的なステップを、2017年の終わりまで積み重ねていくつもりです。

レポートを締めくくる前に、最後にもう一度、平和首長会議やその職員の皆さんに対し、このような機会をいただいたことに御礼を申し上げます。また、広島市立大学とその職員・学生の皆さまにも、共に素晴らしい時間を過ごせたこと、そして昨年7月から8月に私が学んだ全てのことについて感謝を申し上げます。非常に謙虚な気持ちになると同時に、力づけられる2週間でした。

これから長期にわたり共に活動できることを心より願っています。多分かの結集による努力のみが、核兵器廃絶を成し得ることでしょう。